

予備校講師との対決を機に 授業公開が加速。 若手もベテランも切磋琢磨する風土へ

三重県立上野高校

日常業務に追われ 授業見学が困難に

教員の平均年齢が40代に満たないほど、若手が多い上野高校。この数年で、若手教員から学校全体へと授業改善の取り組みが広がっている。

同校は地域に根差した進学校だが、生徒数が減少して都市部の高校との競争が激化する状況下、いかに魅力を打ち出していかかという課題を抱えている。なかでも授業はその中核となるべき要素。授業の充実のために、約10年前からお互いの授業を見学し合う授業公開週間が各学期に設けられている。しかし、実際に授業改善に役立てるには物足りなさがあつたと、教務主任の國井圭己先生は振り返る。

「日常の業務に追われ、機会があつてもなかなか授業見学する時間が取れないのが実態。また、見学しても個人的に感想を伝える程度で、意見交換する場はありませんでした」(國井先生)

協同学習の実践者や 予備校講師を招いて研修

同校の授業改善が本格的に動き出すきっかけとなったのは、2011年度の2つの取り組みだという。

その1つは、少人数グループで学び合う「協同学習」を実践する、私立鈴鹿中学校の若佐純巨先生を招いた研修会の開催だ。これは、若手教員中心に今後の同校を考えるみらい委員会の委員長を務める藤森崇史先生が、三重県教員の自主的な授業研究会で若佐先生と知り合ったことから実現したもの。研修会では若佐先生が同校生徒に数学の授業を実施。京都大学の入試問題を題材にいろんな角度から生徒に考えさせる授業展開と、生徒が自ら気づきを得る様子に、それぞれが授業改善のヒントをつかんだという。

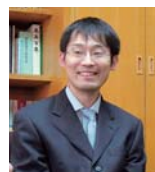
「若佐先生のような授業スタイルが生徒の理解を助けることがよくわかりました。以後、私は授業中に演習問題をするときにはグループを作って生徒が教え合うように



教務主任
國井圭己先生



みらい委員会委員長
藤森崇史先生



みらい委員会
河井隆志先生

しています」(藤森先生)

もう1つは、当時の教頭の発案による、予備校講師との授業対決だ。同校の河井隆志先生と予備校講師がそれぞれ70分間、同じクラスに対して英語の授業を実施。両者を点数で評価するのではなく、教員らの対話により課題や改善策を共有する事後検討会が、他校からの参加者も交えて行われた。予備校講師の授業の良さとしてあがったのは、授業冒頭の「つかみ」のつまみや、英文を文頭から順に理解していく直読直解方式による英文読解など。一方、同校代表の河井先生の授業は、英文の内容を日本語で要約させるグループ作業を取り入れ、英語力だけでなく国語力も意識している点が好評だった(図1)。

「予備校の先生の話術やリズム感のある授業はさすがだと思いました。また、自分の授業の良い点を評価していただけたのは自信になりました」(河井先生)

この授業対決後、刺激を受けた若手中心に授業改善のグループが発足。年度内に3人の教員が初任者研修を兼ねて自

主的に公開研究授業を行った。

事後検討会までセットされた 公開研究授業を制度化

こうした授業改善の機運の高まりを受け、12年度は教務部が体制整備。外部講師による研修会の開催とともに、事後検討会までを組み込んだ公開研究授業を学校をあげて計画的に行うようにした。

「楽しんでやればいい」と自ら率先して手をあげた教務主任國井先生をはじめ、学期ごとに2人、年間6人の授業を対象として実施。見学者としての参加は自由だが、担当以外の教科の授業も見学し合うことが推奨されている。また、詳細な指導案作成を義務づけることはせず、みらい委員会が考案した簡略版の「授業研究振り返りシート」を導入(図2)。授業者が「本時の達成目標」「理想の授業」を記入したシートに、見学者が気づいたことを書き留めて事後検討会で話し合う材料にしている。

School Data

1899年創立／普通科・理数科／生徒数837人(男子413人・女子424人)／進路状況(2013年度実績)大学78.5%・短大1.3%・専門学校3.5%・就職0.6%・その他15.8%



予備校講師との授業対決。前半は河井先生が教壇に

図1 予備校講師との授業対決における生徒の感想

【河井先生の授業に対する感想】

●いつも通りわかりやすかった。予習でわからなかったところを確実に説明してくれた。●普段行っている要約の授業で、すごく力がついている気がします。●要約のときのグループワーク、ペアワークなど授業が長く感じなかったのが良かった。●Partごとのまとめを聞きたかった。忘れてしまうので板書していただくとありがたいです。スピードが速かった。●今日の馬場先生のような英語を英語のまま理解することを授業でもやってほしい。●要約を重視しているときに普通の内容説明が少し雑になる。

【予備校講師の授業に対する感想】

●「英文を英文のまま理解する」とはこういうことか!!とわかった。やりかたもよくわかった。●英文を繰り返すだけで、一瞬英語だけで読めるようになった!英文が速く読める!!という感覚を覚えられた。●ダイナミックで、時間の使い方に無駄がなかった。内容理解に多くの時間を使うのは新鮮だった。●先生が代われば教え方もいろいろあることがわかった。●進むのが速くて説明している場所を追うので手一杯だった。

図2 授業研究 振り返りシート

ダウンロード可

授業研究 振り返りシート	氏名	職名	所属	期日	時間
振り返り内容	予備校講師の授業内容	本校での授業内容	感想	気づき	今後の授業改善

新しいことに挑戦する時間をどう捻出すればいいでしょうか? 例えば、教材作りは手間がかかりますが、私はインターネット上で公開されている授業プリントを活用するなど効率化しています。息切れせず持続できる挑戦にしたいですね。(河井先生)

「先生方は授業を見合っことにだいぶ積極的になってきました。公開研究授業でなくても、空き時間に隣の教室をのぞいてみるなど日常化しています。そんな教員が努力している様子は、生徒にも前向きに伝わっているようです」(河井先生)

今年度は教科ごとに踏み込んだ授業改善ができるよう、教科別に課題をあげたうえで、昨年度同様に公開研究授業に取り組んでいく予定だ。さらに河井先生は、公開研究授業の場だけでなく日常的に教員間が学び合うことを目指しているという。

「指導方法に迷うことがあれば、気軽に同僚や先輩教員に相談できる雰囲気がある理想です。特に新採用の教員は悩んで当然。一人で解決しようと思わず、みんなでワイワイやればいいのです」(河井先生)

入学する生徒が変化するなか、今後も授業改善の課題は尽きない。しかし、そうした変化を同校はチャンスととらえる。

「協同学習を行う中学の増加などで、生徒は発表がうまくなっていると感じていま

す。そこをうまく生かせれば、授業をもっと活性化させられるかもしれない。また、iPadなどのデジタル機器を使った授業が広がるなか、今後は新しい授業の可能性も出てきそうです」(河井先生)

実践のポイント

「教科の垣根」「複雑」「強制」をなくし 持続可能な実践に

Q 事後検討会はどう行っていますか?

教科にかかわらず、他の教員の授業の良い点を学ぶというスタンスで実施しています。見学者各自が対象授業から取り入れられる良い点を記入した「授業研究振り返りシート」を使い、ポジティブな意見交換ができるようにしています。(藤森先生)

Q ベテランの先生ほど授業公開に抵抗があるのでは?

確かにその傾向はあるかもしれませんが、

しかし、昨年度の公開研究授業では、ベテランの先生も若手の授業をみて「なるほど」というご意見をいただきました。このように、ベテランならではのノウハウを共有することから始められればいいのではないのでしょうか。(河井先生)

Q どうしたら若手の力を生かせる?

一人では力のない若手でも、みらい委員会のような組織で動けば学校の流れを変えることも可能だと思っています。みらい委員会では経験の浅い教員からも気軽に学校の課題や改善点があるよう、オフサイトミーティングや親睦会を定期的に開催しています。教員同士のつながりもでき、そこであがったアイデアが公開研究授業の実践方法にも生かされています。(藤森先生)

Q 授業改善の効果はどう測っていますか?

本校では約10年前から生徒による授

業評価を年2回(1学期・3学期)実施しており、授業改善のための反省材料にしています。目標にしているのは、学校全体の平均で満足度(とても満足+満足)80%以上。現在、それ以上の達成ができています。担当やクラス単位の結果データの扱いは難しく、十分活用できているとはいえないので、今後の課題のひとつです。(河井先生)

Q 授業改善のために個人的に努力していることはありますか?

県内には学校や教科の枠を超えた教員の研究会がいくつかあるので、可能な範囲で参加しています。参加の意義は個人の授業改善にとどまらず、研修会で岩佐先生と知り合ったことが11年度の研修会開催につながったように、他の先生方へ広げられることも可能です。また、今の生徒たちには受け身な態度が目立ちますが、教員が主体的に学ぶ姿をみて、生徒も自分から授業に参加する意識が高まればと期待しています。(藤森先生)

※私立鈴鹿中学・高校の岩佐純巨先生の「数学」の授業は、小誌No.43(12年10月発行)「教科でキャリア教育」でも取り上げさせていただきました